



Title	ベトナム北部華人の移住と社会的ネットワーク : 広東系／客家系家族を事例として
Author(s)	河合, 洋尚; 呉, 雲霞
Citation	アジア太平洋論叢. 2022, 24, p. 171-184
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95086
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ベトナム北部華人の移住と社会的ネットワーク — 広東系／客家系家族を事例として —

Immigration of Overseas Chinese from North Vietnam and Their Social Networks: A Case Study of the Cantonese and Hakka Experience

河合洋尚*

KAWAI Hironao

呉雲霞**

WU Yunxia

Abstract

Most Chinese in northern Vietnam emigrated overseas, primarily because of the Chinese Exclusion Movement in the late 1970s. This paper is based on fieldwork in northern Vietnam and Overseas Chinese State Farms, investigating six households with a northern Vietnamese background: Four Cantonese Chinese in Haiphong and two Hakka Ngai in overseas Chinese farms. It reports on the migration of Chinese from northern Vietnam and the global networks they formed in the places they migrated to, analyzing why some Chinese chose to remain in northern Vietnam and the motivations of those Chinese who left northern Vietnam to maintain communication with the land they left.

Keywords: Immigration, global network, diasporic space, Vietnam, Cantonese, Ngai, Hakka

I はじめに

本稿は、ベトナムおよび中国で実施したフィールドワークに基づき、ベトナム北部華人の移住、及び移住により形成された社会的ネットワークの一部を報告するものである⁽¹⁾。

ベトナムの華僑・華人については近年多くの人類学的な研究がなされているが、その対象地域は南部や中部に偏る傾向が強い。それに比べて、ベトナム北部の華僑・華人を対象とする調査研究は、歴史学や政治学などの一部の例外を除き、フィールドワークを交えた調査は未だに限られている。特に、1970年代末の華人排斥運動により大半の華僑・華人がベトナム北部を離れて以降、現地調査が困難であるなどの理由で、ベトナム北部華人の人類学的研究は空白に近い状況となっている⁽²⁾。

こうした状況のなか、我々は、ベトナム北部の華人を対象にフィールドワークする機会を幸運にも得ることができた。我々は、まずベトナム北部のハイフォンで広東系華人への聞き取り調査をおこない、さらに客家系のンガイ人にも調査の手を広げた。また、ベトナム北部だけでなく、ベトナムの南部や中国の華僑農場にも赴き追跡調査をおこなった⁽³⁾。

我々の調査における問題関心は、ベトナム北部の華人が大量に現地を離れた後、どのような社会的ネットワークが国境を超えて再形成されているのか、ということにある。具体的には、

①ベトナム北部の一部の華人は、なぜベトナムに残り、どのような暮らしを選んでいるのか、

* 東京都立大学人文社会学部社会人類学教室・准教授

** 英ランカスター大学政治・哲学・宗教学部 (Department of Politics, Philosophy and Religion) ・博士後期課程

②逆に大多数の華人は、なぜ、どのようにベトナムから海外へ移住していったのか、③両者にはどのようなつながりが形成されるようになっているのか、の3点を問題意識として、ベトナム国内外でフィールドワークを展開した。さらに、調査では、男性だけでなく女性にもインタビューをおこない、女性の視点や役割にも注意を払うことを念頭に置いた。

本稿では、そのうちベトナムの北部と中国の花都華僑農場で聞き取り調査をした6つの家族に焦点を当て、彼らの移住と国境を超えたネットワーク形成について論じた。とりわけ、ベトナムと中国の双方でのフィールドワークを通し、ベトナム北部（出身）の華人をめぐる「いま」の一端を描き出すことを本稿の目的とする。

なお、本稿では、華僑・華人の対象を漢族系の住民に限定している。ベトナムでは54の民族のうち、シナ語（漢語）の系統に属す民族は、ホア族、サンジウ族、ンガイ族（ベトナム研究者は通常、ガイ族と呼称する）の3つである。本稿では、ベトナム北部にルーツをもつ6つの家族（そのうち4つは広東系⁽⁴⁾、2つは客家系に属す）を対象とするが、主要な被調査者はいずれもベトナム移民2～3世であった。一般的には華僑と華人は現地国籍取得の有無で区別されるが、本稿では便宜的に、ベトナム移民2世以降の中国人系住民を華人と表記する。

II ハイフォン在住の広東系家族

ベトナム北部は中国と隣接しており、秦の時代より中国の版図に組み込まれてきた。フランス統治時代（1887～1954年）にも、中国系の人びとが移住し、華僑・華人として暮らしていた。1939年に刊行された『仏領印度支那に於ける華僑』によると、ベトナム北部の華僑社会では広東人、湖北人、雲南人が主流であったという（満鉄東亜経済調査局 1939: 57）。また、フランス統治時代のハノイには広東会館と福建会館があったことから（山本 1959）、当時のベトナム北部には一定数の福建人がいたと推測される⁽⁵⁾。

ベトナム北部では、ハノイだけでなく、各地で華僑・華人が住んでいたが、そのうち華僑・華人人口が多かったのは北部の湾港都市であるハイフォンである。ハイフンの中華学校で教鞭をとっていたA1氏とB1氏によれば、1955年の時点でハイフォンには約2万人の華僑・華人が居住しており、なかでも広東系漢族が最も多かった⁽⁶⁾。次いで福建系漢族が多く、客家系の人々もクラスに1人の割合でいた。他方で、客家系のンガイ人は、クアンニン省の山岳地帯に多く居住していたのだという。

A1氏とB1氏はともに広東系漢族であり、現在もハイフォンに居住している。彼らの話では、1978～79年にベトナムで華人排斥運動が起きた時、ハイフンのほとんどの華僑・華人は、中国に帰国したり、香港経由で欧米やオーストラリアに移住したりした。彼らは、ハイフォンにはすでに漢族がほとんど住んでおらず、正確な統計はないが、長期で在住している華人は約200名であると推定して語る。また、彼らの知る限り、ハイフォンに残っている華人は全てが広東系のホア族である。ハイフンの広東系家族は、ほとんどが広州、南海、東莞、新会など広



図1 ベトナム地図

東省中部から移住している。

それでは、ハイフォンではなぜ一部の広東人家族が残っているのだろうか。A 1氏とB 1氏を通して、その暮らしと家族史をみていくことにしよう。



写真1 ハイフォンの町

A 1氏の記憶によると、ハイフォンの中華街には多くの華僑・華人が住んでおり、その近くには中華会館があった。中華会館は、広東人と福建人が共有で使用しており、また会館には華僑・華人の崇拜対象として「三婆廟」があった。しかし、1978～79年にベトナムで華人排斥の動きが高まると、ハイフォンの大多数の華僑・華人はベトナムを離れ、中国や欧米諸国などに移住していった。だが、A 1氏は妻がベトナム人であり、教師としての生活基盤がしっかりとっていたことから、ハイフォンに残った。



写真2 ハイフォンの旧中華街



写真3 中華会館跡の市場

だが、1970年代末に華僑・華人がほぼいなくなると、中華街も形骸化し、キン族など非漢族系の住民が暮らす地区に変わった(写真2)。また、中華会館は市場として利用されるようになった(写真3)の。こうした状況のなか、家族Aは、中華街を離れ、いま住んでいる郊外に移住せざるをえなかった。この郊外の住宅街に住んでいるのはほとんどがキン族であり、純粋な華人はA 1氏のみである。また、A 2氏がベトナム人であることから、家族Aは、ベトナム語を日常的に使い、ベトナムの習俗で日々の生活を送っている。例えば、家庭料理はベトナム料理が中心であり、春節時には他のベトナム人家庭と同様に、家に桃の花を飾る。このことにつ

いてA1氏は、「ベトナムと中国南部の文化はそれほど差異がないので、あまり違和感がない」と語る。しかし他方で、A1氏は、華人の友人とは広東語で会話し、漢詩をつくることを趣味としている。また、A1氏は「漢族」としてのアイデンティティを強くもっている。

A1氏と同様、息子のA3氏もキン族の女性と結婚し、両親や妻子とともに暮らしている。A3氏は、主にベトナム語の環境で育ってきたため、広東語は解するものの中国語はほとんど分からなかったのだという。だが彼は、A1氏と同様にベトナム国籍を持っているが、漢族系の少数民族であるホア族に属している。A3氏の身分証には、ホア族ではなく「漢族」の二文字が書かれており⁽⁸⁾、彼自身も漢族としてのアイデンティティを強くもっている。それゆえ、彼は、その身分を活かすために中国語を学び、現在は中国との交易や通訳の仕事に従事している。A3氏は、中国とベトナムを往来する日々を送っており、双方で仕事上のネットワークを築き上げている。

【家族Bの事例】

B1氏（男性）はA1氏と同年代の昔馴染みで、今も頻繁に交流する友人である。B1氏の両親は、辛亥革命（1911年）前に広東省の南海からハイフォンに移住した。B1氏の両親によると、辛亥革命前のハイフォンでは、約25%が華僑・華人であったという。B1氏は、A1氏と同じ中華学校で教師を務めてきた。ただし、A1氏と異なるのは、B1氏の妻であるB2氏が華人だということである。家族Bも、かつてはハイフォン市内の中華街に住んでおり、息子1人と娘1人をもうけた。

B1氏は、妻が華人であるが、中華学校の責任ある地位にいたため、現地社会とつながりが強かった。それゆえ、1970年代末に大多数の華僑・華人が中国を離れたとき、B1氏とその家族が選択したのは、ハイフォンに残ることであった。ただし、中華街からは離れざるを得なくなり、家族Bは、家族Aとは異なる郊外の住宅街に移住した。この住宅街の居住者もキン族など非漢族系住民ばかりであり、家族Aと同様、ベトナム社会に溶け込んで暮らす道を選んだ。

家族Bは、華人であることを表立って強調することなく日々の生活を送っているが、実際の生活文化は家族Aと幾分か異なっている。例えば、家族Bでは中華料理を日常的につくり、台所には竈の神を供えて信仰している。家族Bは、一般的に華人の家庭で竈の神を信仰すると考えているが、A1氏の家庭では竈の神は供えていない。

現在、B1氏、B2氏夫妻は、息子であるB3氏およびその妻子と暮らしている。B3氏はハイフォンで生まれ育った華人3世であるが、彼はキン族の女性と結婚した。その一方で、娘のB4氏は、中国福建省の福州に移住している。B4氏は、中国に行ったとき中国籍の男性と知り合い、結婚してそのまま中国に居着いたのだという。B1氏、B2氏夫妻は、娘を訪ねて時々福州に行っている。

III 欧米在住華人のハイフォンへの帰還

このようにハイフォン在住の華人は、漢族としてのアイデンティティをもちつつも、それを表立って強調することなく、ベトナム社会に溶け込んで暮らしている。だが他方で、彼らは、ハイフォンから海外に移住した一部の華人と現在もつながりを保っている。1970年代末にハイフォンを去った華人家族は現在、世界各地に離散しているが、彼らの全てがハイフォンとの関係を絶ったわけではない。何かしらの理由で、一時的にハイフォンに戻って来るケースも珍しくはない。その具体例として、次に家族Cと家族Dを見てみることにしよう。

【家族C】

C1氏・C2氏夫妻は、ハイフォン出身の広東系華人である。ハイフォンでは華人学校で学び、中華街に住んでいた。だが、1970年代末の華人排斥運動後、家族Cは全員がハイフォンから離れ、海外に移住した。現在、ハイフォンには家族Cの成員が1人も残っていないという。

我々がハイフォンの華人に聞いた話を整理すると、ハイフォンから海外に移住するルートには、主に2つある。その1つは、ハイフォンから陸路や海路で中国大陆に行くルートである。例えば、越・中国境のモンカイ・東興を経由して広西チワン族自治区の北海や南寧に行くこともあれば、海路で海南島や広州に出ることもあった。この時期に中国に戻った華人は、一般的に祖籍地ではなく、中国政府により指定された華僑農場でまず定住した。もう1つは、1979年にハイフォンから船で香港に行くルートである。彼らは、難民として香港に到着した後、さらにアメリカ、カナダ、イギリスなどの欧米諸国、もしくはオーストラリアに渡る。そのうち、家族Cは、後者のルートにより香港経由でカナダへと移住した。

一般的にハイフォンに残った広東系華人は、A1氏のように配偶者がベトナム人であるか、家族Bのようにベトナム地域社会と良好な関係を築いてきた者である。A1氏とB1氏によれば、教育界の99%はハイフォンを離れたが、軍隊に参加しベトナム社会に近い人々は、ベトナムに留まる確率が相対的に高い。しかし、商売を営むなど、ベトナムの政府や市民と特に密接な関係を結んでいない家族は、ハイフォンを離れていった。家族Cは、大勢の華僑・華人家族と同様、家族全員で海外に行くことを決め、生活の基盤をカナダに移している。しかし、C1氏とC2氏は、高齢であるにもかかわらず、毎年ハイフォンに戻ってくる。A1氏、B1氏など、学生時代の同級生に会うためである。

ベトナム華人において、家族・親族の他に重要なネットワークは、同じ学校の同窓生であること、すなわち「学縁」である。C1・C2氏夫妻は、「学縁」で結ばれるネットワークを今でも大切にしており、そのために出生地を訪れている。彼らは、A1氏やB1氏と商売上のつながりを特にもっているわけではなく、懐かしい顔に会って一緒に会話や食事を楽しむのである。しかし、C1氏・C2氏の子供の世代になると、カナダ市民としてのアイデンティティを一層強めるため、ハイフォンとのつながりは薄くなっている。

【家族D】

次に、一族の成員がベトナム、香港、オーストラリアなどに離散している例として、家族Dをとりあげるとしよう。家族Dは、ハイフォンに住む広東系華人であったが、1970年代末にほとんどの成員が香港に移住した。ただし、D1氏だけは、キン族の男性と結婚していたため、ハイフォンに残った。他の家族は香港で生活をしたり、香港から第三国に移住したりしたため、家族Dの成員は異なる国に住むこととなった。ハイフォンに住むD1氏は、今でも海外に移住した家族と連絡をとりあっている。そして、2013年12月、D1氏の姪にあたるD2氏が、キン族の男性D3氏と結婚するというので、ハイフォンを訪れることになった。現在、D2氏はオーストラリアで、D3氏はスロバキア共和国で働いているのだが、2人は婚約式をおこなうためにハイフォンに戻った。そして、D2氏の叔母方親族とD3氏のベトナムの親族が集まり、同月30日に市内で婚約式が催された。

D1氏とD2氏は華人であるが、D1氏がキン族と結婚したため、会場に参席した者の大半はキン族であった。キン族の親戚のなかには数名、広東語を解する者がいたが、婚約式は「ベトナム式」の流儀で催された。婚約式のおおまかな流れは次の通りである。第一に、白と紫を

ベースとした垂れ幕や風船を用いて、普段は商店として使われているスペースを婚約式の会場とする（写真4）。会場の外観は白と紫で構成されているが、会場の奥には赤と白の垂れ幕があり、中国の結婚式でよく見られる「囍」の文字がある。第二に、婚約式当日、新郎側が白い花で飾った「花車」で新婦側を迎えに行く。そして、新婦の家で新婦の祖先を参拝し結婚の報告をしてから、会場に向かう。第三に、新郎側は礼品をもって新婦側を迎える。そのなかで、新郎側は、赤いもち米に鶏を乗せた礼品を新婦側に渡す儀式をおこなう（写真5）。第四に、会場に入ったD2氏とD3氏は、D1など双方の親戚にお茶を注ぐ儀式をおこない、続いて会場に集まった人々に酒を注ぐなどしてもてなす。キン族の女性親族の数名はベトナムの民族衣装として知られるアオザイを着用していた。



写真4 婚約式の会場



写真5 新郎側から贈答品を渡す

A1式によれば、婚約式を盛大に催すことは、ベトナムの華人でも珍しくはなく、またベトナムではキン族と華人の婚約式・結婚式に形式上の大差はない。しかし、彼は、家族Dの婚約式はいくつかの点で華人のそれとは異なると語る。まず、華人は、「花車」を白い花で飾ることがなければ、会場を紫でデザインすることもない。華人にとって、これらは葬式を連想させるものである。だが、キン族は黒や鮮やかな赤でなければ問題視しない。また、赤いもち米に鶏を乗せた贈答品を贈ることもキン族の習慣であるという。すなわち、この婚礼式は、現地の華人が違和感を抱くほど、キン族の流儀にしたがって開催したものといえる。

IV 客家系家族の中国華僑農場への移住

ベトナム北部の華人社会では、広東系華人がマジョリティではあるが、他にも福建人、湖南人、雲南人、シナ語系統のサンジウ族、ンガイ族が居住している。そのうち、我々は、「ンガイ」と呼ばれる客家系の人々について、ベトナム国内外で調査をおこなった。彼らは、現在の公的な民族カテゴリーとしては、ンガイ族、またはホア族などに属する（河合 2018; cf. 伊藤 2018）。しかし彼らは、通常、ンガイ人や漢族などを自称している。したがって、本稿では、彼らをンガイ人と表記する。

ンガイ人は、少なくとも 18 世紀以前に、中国の広西チワン族自治区（以下、広西と呼ぶ）から陸路でベトナム東北部に移住した（河合・呉 2014a: 95、2014b）。一般的にンガイ人のルーツは、広西の防城港市から広東省西部の廉州市にかけてであり、このエリアは清代に欽州府、廉州府の管轄区であったため略して「欽廉」と呼ばれている。ンガイ人は、欽廉地区からベト

ナムに移住後、農耕や漁業に従事し、周囲のヌンと変わらない生活を送ってきた (Vaillant 1990)。古田元夫によると、ンガイ人は、東北部のクアンニン省で主に居住し、第一次インドシナ戦争時 (1946～54 年) には約 10 万人の人口を抱えていたのだという。また、フランス統治時代、ンガイ人は、ヌンと認定されていたが、1948 年に中国共産党が介入すると、華僑として扱われるようになった (古田 1991:429-435)。

1954 年にベトナムが南北に分裂し、北部で社会主義政権が成立すると、国民党を支持していた層を中心とし、一部のンガイ人がホーチミンやドンナイ省などの南部に移住した。彼らは、ハイフォンを経由して南部に移住し、各地で護国観音廟を建設して、それを精神的支柱としている。さらに、2010 年には、ンガイ人を含む広西出身の華人がホーチミンの護国観音廟で、彼らの同郷組織である欽廉同郷会を結成した。



写真6 ホーチミンの護国観音廟 (左奥) と欽廉会館 (右奥)

組織できるほどのンガイ人がまだ生活しているが、ベトナム北部でンガイ人を見ることは少なくなっている (范 1999: 220)。

実際に、我々は東北部でンガイ人を訪問する糸口を探したが、現地の華人からは「ンガイ人はもうベトナムにいない」という答えが返ってくるばかりであった。A 3 氏は、中国と近いラオカイやモンカイにンガイ人がいると話してくれたことがある。また、伊藤正子 (2018: 266) によると、ホア族に属するンガイ人がベトナム北部に相当数居住している⁽¹⁰⁾。他方で、ンガイ人の情報を収集しているうちに徐々に明らかになってきたのは、中国の華僑農場には多くのンガイ人が、今も居住しているということである。そこで、我々は、ベトナムでの調査と並行し、中国のいくつかの華僑農場で、ンガイ人に関する短期調査を実施した⁽¹¹⁾。そのうち我々が特に集中して調査したのが、広東省広州市の花都華僑農場である。

花都華僑農場は、港頭、僑北苑、僑南苑、僑興苑の4つの区域に分かれている。花都華僑農場の、ある責任者によると、この農場の総人口は約 5000 人であり、そのうち約 1000 人がンガイ人である。特に僑北苑にはンガイ人が多く、正確な統計はないが、約 80%がンガイ人であると地元で見積もられている。我々が調査した範囲では、ここのンガイ人の大多数はベトナム北部の出身であり、今でもベトナム北部と何かしらのつながりをもっていることがある。その具体例として、次に2つの家族の移住史とネットワークを挙げてみることにする。

ある欽廉同郷会の幹部 (ンガイ人) によると、広東系華人同様、ンガイ人も 1970 年代末の華人排斥運動により、大多数が海外に移住した。そのうち、ベトナム南部に移住していたンガイ人は、アメリカ、カナダ、オーストラリアなどに再移住し、移住先で欽廉同郷会を組織し、護国観音廟を建設した⁽⁹⁾。その一方で、クアンニン省などの北部に住み続けたンガイ人は、華人排斥運動の煽りを受け、その多くが中国に移住した。中国に移住したンガイ人は、祖籍地である欽廉地区に必ずしも戻らず、中国政府の手配により中国南部各地の華僑農場で暮らすこととなった。ベトナム南部では、激減したといっても欽廉同郷会が



写真7 花都華僑農場・僑北苑

【家族E】

家族Eはハノイに在住していた華人の一家である。ンガイ人の男性（E 1氏）と雲南系華人の女性（E 2氏）がハノイで知り合って結婚し、4人の子供を産んだ。一家はハノイで生活を営んでいたが、1978年に華人排斥の煽りを受けて、ベトナムを出国することに決めた。ただし、ベトナム人女性と結婚し子供もいた長兄のE 3氏だけは、ハノイに残った。E 1氏とE 2氏は、次男（E 4氏）、長女（E 5氏）、末弟（E 6氏）を連れて中国に向かい、花都華僑農場に落ち着いた。だが、E 4氏とその妻（潮

州系華人）は生活の厳しさに耐え切れず、すぐに香港経由でカナダに移住した。

E 1氏、E 2氏、E 5氏、E 6氏の4人は、花都華僑農場に留まり、まずは農作業に従事し、後に靴工場で働いた。19歳でベトナムを出国したE 5氏は、花都華僑農場に移住してから、そのインドネシア帰国華僑の男性と知り合い結婚した。さらに、E 6氏は、広州の女性と結婚し、華僑農場を出た。E 6氏は、先述のA 3氏と同様、華人としての立場を活かしてベトナムとの交易や通訳の仕事に従事しており、中国とベトナムを往来している。やがてE 1氏とE 2氏が亡くなると、花都華僑農場で暮らすのは長女のE 5氏のみとなった。

E 5氏には、娘が2人、息子が1人いるが、娘は結婚して嫁ぎ、息子は北京に移住している。E 5氏の夫はすでに亡くなっているため、現在は1人暮らしである。E 5氏は、中国に来てからベトナムには戻っていないという。だから、兄であるE 3氏には会っていない。E 6氏は、仕事の関係でベトナムに行くので、その時にE 3氏と会う。E 5氏は、E 6氏を通じてE 3氏のことを聞いているが、E 3氏の経済状況が良くないことを聞き、一緒に中国に来れば良かったのにと嘆いている。他方で、E 4氏の夫妻は、時々カナダから花都華僑農場に来るので、その時に会っている。

E 1氏は、ンガイ人であることを上述したが、E 5氏は父親がンガイ人であることを知らなかった。彼女は、父親が広西の防城港からハノイに移住したことは知っていたが、広西出身の漢族としか認識していなかった。2015年10月、我々が聞き取り調査をしていた時、E 1氏の友人だった高齢者男性が、E 1氏は実はンガイ人であったという話をしたことで、E 5氏は初めて父親がンガイ人であることを知った。こうした経緯であるから、当然、E 5氏はンガイ人や客家としてのアイデンティティをもっていなかった。興味深いことに、彼女はずっとンガイ人を「ベトナム人」とみなしてきた。そして、自身は、ンガイ人とは異なる「正統な漢族」とであると主張してきたのである。

E 5氏は、ンガイ人の特徴として、祖先祭祀を重視することを挙げている。一般のベトナム華僑やインドネシア華僑は祖先崇拝をそれほど派手にはしないが、ンガイ人は、祖先の位牌を家庭に置き、「打斎」（死後に道士を招いて供養をする儀礼）にする点で異なるのだと、E 5氏は語る。実際、E 5氏の自宅には祖先の位牌が置かれておらず、E 6氏がベトナムで買ってきただけの飾り物を自宅に並べている。E 5氏は、ベトナムへの愛着が強く、ベトナム料理を頻繁につくっている。しかし、娘の世代になると、ベトナムとの心的距離が生じており、娘はベトナム料理もつukれないのだという。



写真 8：ンガイ人家庭の祭壇

【家族 F】

家族 E と異なり、家族 F は、ンガイ人としての自己意識を強くもつ。家族 F は、華人排斥運動より前の 1960 年に、一家で海南島の華僑農場に移住した。ンガイ人の父親 F 1 氏とキン族の母親のもと、F 2 氏（女性、1970 年代生まれ）とその弟の F 3 氏（1980 年代生まれ）は海南島で生まれた。現在、家族 F は花都華僑農場で暮らしており、彼らの叔父の 1 人が地元政府の幹部になっている。家族 F は、家庭内でンガイ語を用いており、農場内の他の帰国華僑と話するときは一般的に広東語を用いる。母方の親戚にはサンジウ族である G 氏がいるが、彼も日常的にンガイ語を話している⁽¹²⁾。

F 2 氏は、花都華僑農場に移住後、マレーシア帰国華僑の男性と結婚した。夫は、地元花都出身の客家である。F 2 氏の父方が防城港出身のンガイ人であることから、ンガイ人としてのアイデンティティを幼少からもってきた。し

かし、彼女は、中国に来るまで自身が客家であることを知らなかったという。F 2 氏は、夫の姑の影響を受けて客家としてのアイデンティティをもち、自宅の祭壇も「客家仕様」にしたのだと語る。F 2 氏の自宅には、祖先の位牌と観音を祀る祭壇がある。写真 8 に見るように、祭壇の上方には祖先の位牌と観音が一緒に置かれており、下方には「五方五土龍神」の神位と土地神が置かれている。ベトナムでは、祖先と神を一緒に置くことも、「五方五土龍神」の神位を置くこともない。だが、F 2 氏は、姑の意見により「広東客家」の方式を採用したのだと語る。

このように F 2 氏は、客家としてのアイデンティティを強める一方、ベトナムとは心的な距離をもっている。家族 F は、一家で中国に移住したものの、ベトナムには祖先の墓があり、親戚が一部残っている。それゆえ、F 1 氏など年輩の世代は、毎年の清明節になると代表を派遣してベトナムに行って墓を参り、親戚を訪問する。しかしながら、ベトナムの墓参りと親戚訪問に若者が一緒に行くことはない。F 2 氏は、ベトナムには行ったこともないし、親戚を訪問してもベトナム語が分からないから言葉が通じないと語る。我々は、ンガイ人の親戚を訪問するのだからンガイ語で会話できるのではないかと F 2 氏に問い直したことがあるが、彼女は素っ気なく「興味ない」と答えるだけであった。また、F 3 氏も「ベトナムを離れて 40 年も経っているのだから行く必要はない」と語っていた。

以上、2つの家族の事例をとりあげたが、花都華僑農場のンガイ人のなかには、仕事や親戚訪問、墓参りのため定期的にベトナムに戻る人びとがいることが分かる。他にも、花都華僑農場近くの市場で働く、あるンガイ人の女性は、華人としての立場を活かして頻繁にモンカイに行き、ベトナムの物産品を売っている。また、ベトナム帰郷僑友会の幹部である H 氏（男性、1950 年代生まれ）は、母親の墓がベトナム北部のクアンニン省にあるため、毎年、モンカイを経由して定期的にベトナムに戻っている。特に祖先崇拝は主に男性の責務と考えられていることもあり、この理由でベトナムに戻るの一般的に男性である。ただし、F 2 氏や F 3 氏にみるように、世代が下るごとにベトナムとの関係が薄れていく傾向もみられる。

他方で、ンガイ人は、中国に移住後、客家としてのアイデンティティを強めている。ンガイ人は、今でこそ客家の系統に属すと言われるが、ベトナム在住時には客家としてのアイデンテ

イティをもたなかった。それゆえ、中国に移住してはじめて自らが客家であると知ったという話は、花都華僑農場のンガイ人から頻繁に耳にする。例えば、H氏は、1970年代末に花都華僑農場へ移住した時、華僑農場の周囲に住む客家が似たような言語を話すことから、自らが客家であることを知ったのだと語る。さらに、花都華僑農場の近くで華僑レストランを経営するI氏は、客家としての気づきから、中国の代表的な客家料理として知られる「梅菜扣肉（モイチョイカウニョッ）」や「釀豆腐（ヨンテウフ）」を提供し始めた。I氏は、これらをンガイ人の食であると話す。前者は春節など特定の時しか食さなかったし、後者はベトナムでは見たことがないというンガイ人もいる。このように、ンガイ人は、中国に移住してから徐々に客家の言説やアイデンティティを取り入れるようになっていく。

V おわりに

本稿は、ベトナム北部の華人、およびそこから移住した華人の家族を事例としてとりあげた。彼らの移住と社会的ネットワークの再形成について冒頭で述べた3つの問題意識に基づき整理すると、次の通りである。

第一に、ベトナム北部の一部の華人が現地に残った背景には、彼らのベトナム社会とのかかわりが関係している。簡潔に言えば、ベトナム北部に在住する華人は、何かしらの理由でベトナム社会と深いつながりをもっていた。本稿の事例で特に注目されるのは、婚姻関係である。すなわち、A1氏、D1氏、E3氏のように、キン族と結婚して子供ができ、ベトナムに生活基盤を築いていたケースでは、ベトナムに残る道を選ぶこともありうる。特に、華人男性とベトナム人女性が結婚する比率は、その逆のパターンより相対的に高いため、ベトナム人女性が華人の「現地化」を推し進めていく要因の一つとなっている⁽⁴³⁾。ただし、B1氏・B2氏夫妻のように、現地で一定の地位を築き上げていた華人夫婦が残るパターンがあることも、本稿より明らかである。

第二に、ベトナム華人の海外移住は、家族Fのように1960年代にもみられる。我々が聞いた話では、他にも留学目的で1950年代に移住した家族があるという。しかし、ベトナム華人が大量に海外へ移住する契機となったのは、1970年代末の華人排斥運動時である。この時期、ベトナム北部の華人は、いくつかのルートで海外に移住した。現時点での調査では、(A)ベトナム北部から中国の華僑農場に移住するルート、(B)ベトナム北部から香港経由で欧米諸国やオーストラリアに移住するルート、(C)ベトナム北部からベトナム南部に移住し、さらに欧米諸国やオーストラリアに再移住するルート、などがあることが判明した。

第三に、ベトナム北部の華人の大多数は、中国や欧米諸国などに移住したが、ベトナムとの関係が必ずしも切れていないことが分かった。現段階の調査に基づく、海外に移住した華人がベトナムとつながっている理由は、一つ目に血縁関係、二つ目に学縁関係、三つ目に経済的関係である。すなわち、海外に移住した華人は、ベトナムに残った家族や同窓生を訪ねて、定期的にベトナム北部に戻り、つながりを保っている。また、クアンニン省のンガイ人のように「根こそぎ」移住をし、親族が残っていても、家族の墓があるという理由でベトナム北部に戻っている場合もある。他方で、ベトナム北部（出身）の華人は、言語や人脈のうえでの利点から、ベトナム・中国間の交易や通訳の仕事に従事し、ネットワークを広げることもある。

このことから明らかであるのは、たとえベトナム北部に一部の華人しか住んでいなくても、親族・知人もしくは墓がそこにあることから、ベトナム北部を含むグローバルなネットワークが再形成されているということである。しかし他方で、海外に移住することで新たな社会関係

やアイデンティティを構築するため、世代が下るごとにベトナムとの関係が薄れている。ベトナムの外で調査をすると分かるのは、どのネットワークに参入するかは個々人によって偏差があるということである。つまり、確かにベトナム北部と中国を結ぶネットワークは国境を超えて再形成されているが、そこにはすべての華人が参入するわけではない。ンガイ人の事例にみるように、他方で客家としてのアイデンティティと言説を獲得し、そのネットワークに参入して生活文化を変容させることもある。

もちろん、本稿は、ハイフォンや花都華僑農場を中心としていくつかの華人家庭を調査したものにすぎず、当然のことながら、ベトナム北部華人のネットワークの全てを論じきれているわけではない。ベトナムの北部華人だけでなく、ベトナム中部・南部、中国南部各地の華僑農場、さらにはアメリカ、カナダ、オーストラリアにも調査の手を広げ、ベトナム北部を出発点とする華人ネットワークを広範に調査していかなければならない。

また、我々がさらなる調査の必要性を実感しているのは、グローバルに形成される華人団体である。例えば、越東寮同郷会や欽廉同郷会は、海外に移住したベトナム華人が参入するグローバルな団体であり、近年は世界各地で定期的に大会を催している。ホーチミンにある欽廉同郷会の幹部によると、彼らは、アメリカやオーストラリアの欽廉同郷会とつながりがあるだけでなく、中国の華僑農場とも連絡があるという。華人団体のつながりを追うことで、ベトナム北部華人が新たに形成している別のネットワークをみることもできるであろう。

ベトナム北部の華人は、大多数が出身地を離れているが、国境を超えたグローバルな網の目に埋め込まれている。それだけに、むしろベトナム北部の華人は、華僑・華人が展開するグローバルなネットワークの一端を捉えるのに適しているといえるのかもしれない。本稿は、その一部を扱ったにすぎないが、ベトナム北部華人が形成するネットワーク、及びそれが生み出す言説空間（ディアスポリック空間）を今後さらに探求していくための布石となりうると、我々は考えている。

付記

本稿は、2016年に GLOCOL Discussion Paper Series として大阪大学グローバルコラボレーションセンターから電子媒体で刊行されたものであるが、その後、同センターの廃止、並びに web サイトの閉鎖に伴い、閲覧できなくなっていたものを、加筆修正したものである。

注

- (1) 本稿は、文部省科学研究費「インターフェイスとしての女性と中国系移民のディアスポリック空間」（基盤研究B、宮原暁代表）の調査に主に基づいている。同研究プロジェクト代表の宮原暁教授、およびベトナムと中国の調査でお世話になった全ての方々にお礼を申し上げる。なお、調査にあたり、河合は、文部省科学研究費「漢族的特色の空間利用とエスニシティの再編——中・越隣接エリアの調査研究」（研究課題番号：25770313）、呉雲霞は中国広東省哲学社会科学規劃項目「嶺南女神の比較研究」（項目番号：GD12YSH01）も併用した。
- (2) 伊藤正子（2009: 133）に基づく。ただし、2010年代に入り、歴史学者である伊藤正子がフィールドワークに基づいてベトナム北部漢族の実態について論じ（伊藤 2018）、人類学者である我々がハイフォンの漢族へのインタビュー調査を報告するなど（河合・呉 2014b）、新たな動きがみられている。
- (3) ベトナムでは、2013年8月、12月、2014年2月に共同調査を実施した。また、2014年1月

と 2015 年 10 月には、花都華僑農場でも共同調査を実施した。その他、河合は、中国各地の華僑農場、アメリカ、オーストラリアの華僑について数度の調査をおこない、呉雲霞は、ベトナムおよび花都華僑農場でベトナム華人の調査を個別におこなった。

- (4) 広東語系の言語を話すエスニック集団。中国研究では「広府人」や「本地人」とも呼ばれるが、本稿では「広東人」と統一して表記する。
- (5) 2013 年 8 月、我々はベトナム社会科学院のチュ・スワンザオ、大西和彦の両氏の案内のもと、ハノイの粵東会館と福建会館を訪れた。そのうち、粵東会館は幼稚園として使われており、内部に多少の痕跡が残されている程度であった。他方、福建会館は昔のまま残されていたが、現在は使われておらず旧跡となっていた。ちなみに、2014 年 1 月に花都華僑農場で話を聞いたハノイ出身の男性（1928 年生まれ）によると、当時は粵東会館、福建会館の他、江西省出身者による九江会館もあったのだという。また、彼によると、粵東会館は現在の広東省東部ではなく、広東省全体（現在の行政区分）の人々が主に利用する会館であった。ただし、当時広東省の管轄下にあった欽廉地区の人々も、出入りすることもあったのだという。現にこの男性は、欽廉地区（防城港市）の出身であるが、粵東会館に属していた。
- (6) フランス統治時代、ベトナム北部にどれくらいの華僑・華人がいたかについては正確な統計が存在しない。韓孝榮によれば、ベトナム北部では 1911 年に 3 万 2000 人、1931 年に 5 万 2000 人の華人がいた。また、1951 年には、ベトナム全体で華僑・華人が約 150 万人、そのうち北部に 90 万人いたという。しかし、資料によっては、ベトナム北部の人口が 1955 年に 17 万人と記載しているもの、1957 年にわずか 5 万人と記載しているものがあり、一定していない（Han 2009）。1955 年に 2 万人の華僑・華人がいたというのは、あくまで現地の人々の記憶と推定に基づく数値である。
- (7) 現在、この市場では中華会館の形跡がわずかに残されている。中華会館では、華人の崇拜対象として「三婆廟」があった。もともとハイフォン市の「三婆廟」の主神は、三婆と関帝であったが、現在では関帝がなくなり、三婆だけが残されている。広東と広西の沿海地区では、漁民は媽祖を「三婆」と呼んでいる。三婆は華人ではなくキン族の崇拜対象となっており、天・地・水の三位一体の聖母として祀られている。
- (8) ハイフォンに在住する広東系華人は、民族としてはホア族に属しているが、戸籍のうえでは「漢族」（Han）、出身地は「中国広東」と書かれている。C 3 氏のようなハーフの場合、父親が華人ならば漢族となるのだという。
- (9) 欽廉同郷会および護国観音廟について、詳しくは芹澤（2009、2018）を参照のこと。欽廉同郷会は、シドニー、オークランド、サンフランシスコ、ロサンゼルスでも結成されている（河合 2018: 201）。
- (10) ただし、我々はまだそれをフィールド調査から確認するに至っていない。我々のベトナム北部での調査が中国と接するハイニン省（現クアンニン省）にとどまっている点は、伊藤（2018: 266）が指摘する通りである。我々はベトナムでは、クアンニン省、ホーチミン、ビエンホアにおいて聞き取り調査をおこなったが、その他の地域のフィールドワークは未着手である。ベトナム北部の各省のほか、フエ、ホイアンを中心とする中部の各省でもンガイ人の調査を進めることは、今後の課題となっている。
- (11) 河合は、広東省梅州市の蕉嶺華僑農場でも短期調査を数回おこなったが、ここではインドネシア帰国華僑とマレーシア帰国華僑が主であり、ンガイ人を見つけることはできなかった。他方で、雲南省の甘庄華僑農場で調査を実施した時には、農場に一定数のンガイ人がいることが確認できた（東京都立大学・阿部朋恒、川瀬由高の両氏との共同調査による）。我々

は2015年10月に深圳の光明華僑農場でも短期調査を実施したが、ここの帰国華僑ではンガイ人の比率が高く、少なくとも半数以上がンガイ人であることが分かった。光明華僑農場における調査は今後の課題にしたい。

- (12) G氏は、自らを少数民族と名乗っており、漢族であるンガイ族（またはンガイ人）とは異なることを認識している。しかし、サンジウ族が中国のどの民族に相当するのかは明確に知らず、祖先が広東省博羅県からベトナムに移住したとだけ語っていた。他方で、2015年10月に花都華僑農場で「打齋」を執り行った若い司祭もサンジウ族を名乗っていたが、彼はサンジウ族が中国のヤオ族に相当すると主張していた。
- (13) 華人の「現地化」において、移住先の女性（妻）が重要な役割を果たすことは、日本の客家をみても明らかである。台湾から日本に移住した客家男性のなかには日本人女性と結婚している例が少なくないが、客家男性と日本人女性が両親の場合、一般的に子供は客家語や中国語を話すことができない。しかし、華人の男女が両親の場合、日本で生活していても子供は客家語や中国語を多少なりとも理解できる傾向にある。

引用・参考文献

欧文・ベトナム語文献

- Dang Nghiem Van, Chu Thai Son, Luu Hung 1984 *The Ethnic Minorities in Vietnam*. Hanoi: Foreign Language Publishing House.
- Han, X. 2009 "Spoiled Guests or Dedicated Patriots? The Chinese in North Vietnam, 1954-1978," *International Journal of Asian Studies* 6(1): 1-36.
- 2013 "Exiled to the Ancestral Land: The Resettlement, Stratification and Assimilation of the Refugees from Vietnam in China," *International Journal of Asian Studies*. 10(1): 25-46.
- Vaillant, L. 1920 "L'Etude anthropologique des Chinois Hak-ka de la province de Mongcay (Tonkin)," *L'Anthropologie*. 30: 83-109.

和文文献

- 伊藤正子 2009「華僑・華人——北部」末成道男（編）『ベトナム文化人類学文献解題』風響社、132-133頁。
- 2018「ベトナムの「華人」政策と北部農村に住むガイの現代史」（特集＝ベトナムのガイ人——客家系マイノリティの歴史・宗教・エスニシティ）『アジア・アフリカ地域研究』17（2）、258-286頁。
- 河合洋尚 2018「越境集団としてのンガイ人——ベトナム漢族をめぐる一考察」（特集＝ベトナムのガイ人——客家系マイノリティの歴史・宗教・エスニシティ）『アジア・アフリカ地域研究』17（2）、180-206頁。
- 河合洋尚・呉雲霞 2014a「ベトナムの客家に関する覚書——移動・社会組織・文化創造」『華僑華人研究』11、93-103頁。
- 2014b「ベトナム客家の移住とアイデンティティ——ンガイ人に関する覚書」『客家與多元化』9、26-51頁。
- 芹澤知広 2009「ベトナム・ホーチミン市のヌン族の華人」『フィールドプラス』2、6頁。
- 2018「ヌン族の華人の祀る神——中国・ベトナム・オーストラリアの実地調査から」（特集＝ベトナムのガイ人——客家系マイノリティの歴史・宗教・エスニシティ）『アジア・アフリカ地域研究』17（2）、227-257頁。
- 古田元夫 1991『ベトナム人共産主義者の民族政策史——革命の中のエスニシティ』大月書店。

満鉄東亜経済調査局 1939 『佛領印度支那に於ける華僑』開明堂。
山本達郎 1959 「ハノイの華僑に関する史料」『南方史研究』1、99-105頁。

中文文献

范宏貴 1999《越南民族与民族問題》広西民族出版社。
—— 2004〈自称客家的越南艾族〉《中国民族報》7月9日。
劉志強 2008〈歷史上廉州、欽州与越南北部地区的文化互動〉《広西民族大学学报（哲学社会科学版）》4、86-92頁。
清風 1996〈《儂族》考〉《八桂僑史》3、1-6頁。
吳靜宜 2010《越南華人遷移史与客家話的使用——以胡志明市為例》國立中央大学客家語文研究所碩士論文。
許志生 1993〈越南的華人社区〉《八桂僑史》2、58-61頁。
吳雲霞 2012《文化伝承の隠形力量——越南の婦女生活与女神信仰》暨南大学出版社。
葉濟正 出版年不詳《越南客家滄桑史》（胡志明市）越南崇正總會内部資料。